光る未来に全ツッパ。①

『クビになった日、幼馴染とユーチューバー!?』

『……は？』

俺、田中タイチ二十一歳。無職になる瞬間、ついに降臨。

「もうええわ！おまえ、クビやクビ！」

「え、マジっすか？」

バイト先の唐揚げ専門店「鶏神」のカウンター奥で、店長がブチ切れてる。こっちは唐揚げパックを手に、愛想笑い中。

理由は簡単。目の前に立つ、マスクとキャップでバレ防止バリバリの女の子に、「今夜ヒマ？俺、唐揚げよりアツい男だけど」とか、調子こいた一言を放っただけ。

俺の黄金ボイスも、イケてるウィンクも、彼女には響かなかったらしい。そもそも、唐揚げ買いに来た女の子が、店員に口説かれるとか、迷惑以外の何モンでもないわな。

「……は？誰？」

冷え切った一言を残し、女の子は足早に去っていく。そして、店長の怒号が追い打ちをかけた。

「クビや！二度と来んなアホ！」

——ついに来たか、この時が。

俺はエプロンを放り投げ、店を出る。胸ポケットにねじ込んだ封筒は、昨日まで働いた四日間分の給料一万二千円。

足取り軽く、俺はアーケード街を歩き出す。何を隠そう、今日は最高のスタートなんだ。

人生に必要なのは、二つだけ。

「女」と「スロット」——それだけ。

将来？仕事？安定？

は？知るか。光る未来に全ツッパや。

——てなわけで、俺は今日も、俺らしく生きることに決めた。

ネオンが瞬く「でらっしゃい松阪店」に到着。東海エリア最強（※俺調べ）のスロット専門店。今夜も、運命の女（台）と出会うため、俺は扉を開ける。

「よう、タイチ。また来たんか」

入り口すぐの休憩スペース。

アイコス片手に話しかけてくるのは、スロット専業の先輩、コースケ。日焼けした肌、髭、無駄にオシャレなサングラス。ニセEXILE感がハンパない。

「おう。今日はマジで勝てる気がするわ」

「いつも言うとるやん」

「マジのマジ。今日の俺は違うから」

「ほーん」

先輩、鼻で笑いやがった。でも、今の俺は違う。仕事も女もクビになったこのタイミング——運命が、俺に「スロット行け」って囁いてる気がする。

シマに足を踏み入れる。選んだのは、最近お気に入りの『番長4』。「いただき」だか「とどろき」だか知らんが、あれがマジで脳汁なんだよな。

打ち始めて30秒。隣に座るギャルっぽい女の子を発見。

金髪、ネイル、まつエク、パーカーにミニスカ。完全に俺好み。運命だろ、これ。

「……よぉ、最近どう？」

「……は？」

振り向いたギャル、ドン引き。

ま、そういうリアクションも慣れたもんよ。俺、打たれ強さだけは全国トップクラスだからな。

台は、というと——クソハマり。投資一万円。二万円。三万円。まるでリールが俺に「帰れ」と言っている。

だが、俺は負けねぇ。負けたくねぇ。

「店員さーん、これ設定マイナス6っすかー？」

「はぁ……」

冷めた顔で流していくサトル店員。クール系イケメン気取りやがって、ちくしょう。

気付けば、手元にはレシートも何もない。ポケットに残るのは、わずかな小銭だけ。

——だけど、終わらねぇ。

人生は、まだ続く。

そんな帰り道。

「やっぱ、あんたダメやわ」

「……ミサキ？」

幼馴染・西園寺ミサキ。地元一軍女子代表、俺の数少ない「元友達」枠。

「スロットもナンパも、もうやめなって」

「いや、無理無理。女とスロ、やめたら俺、死ぬから」

「……はぁ。じゃあ、これやってみる？」

そう言って、スマホを突き出すミサキ。画面には「スロカップルユーチューバー爆誕！」という企画メモ。

「……は？」

「冗談じゃない。本気。私と一緒にやろ」

ミサキは真剣な顔をして言った。

「どうせやめられやんのやったら……せめて、ネタにして生きていけば？」

その瞬間、俺の脳内で何かが光った。

女とスロットを、全部まとめて、〝ネタ〟にする——？

「……おもろいやん」

次号に続く…